

どのような教育観光が気仙沼に学生を集められるか

125 班 佐藤俊太 小山健介 佐々木俊輔

教育旅行を気仙沼に多数誘致することは、気仙沼の復興で重要な鍵を握る。その教育旅行で気仙沼らしさを伝えるためには、学生目線に立った観光手法をとることが有効だ。新たな教育観光スポットを開発することや教育観光に物語性を組み込むことも、気仙沼に学生を集めるために必要なことといえる。

1 序論

気仙沼は、本年 2017 年で震災から六年を迎える。震災の風化は日に日に進み、震災関連のニュースを見ない日も多くなった。そのため私達は、全国に気仙沼を発信することによって、震災の風化を阻止し、かつ津波の恐ろしさと気仙沼の復興への歩みを伝えることができると思った。その手段として最も合致しているのが、私たちが研究テーマとした教育観光である。

2 本論

気仙沼市は現在教育観光に力を入れており、月に 5 から 10 校が来訪している。しかし調査によれば、昨年度教育旅行の来訪校は減っているようで、対応が急務である。

その対応策として、私たちは学生目線に立った教育観光を推す。その理由としては、気仙沼に来た学生の声として、「海に触れたい」「もっと他の場所に生きたい」という声が上がっていることがある。様々なニーズに対応できていないともいえる現状を打開するには、同世代の学生目線に立った教育観光を開発する必要があるといえる。

教育観光プランを実際に組み立てていくうえで、重要なことは二つ挙げられる。

一つは、地域密着型の観光を行うことだ。現在の観光手法として、都市の観光業者がプランを企画し最後まで観光をとり行う、という方法が主流となっている。しかしこれでは、外部の人の意見を聞ける反面、地元ならではの売りが薄れてしまう。そのため、市民によるプロデュースをし、

気仙沼の魅力をアピールできる穴場スポットを観光地に加えるのが有効といえる。

もう一つは、観光に物語性というエッセンスを加えることだ。観光庁も行っているこの取り組みは、一貫したストーリー性を持った観光地をまとめ、一つの観光地として売り出すというもので、「震災前→震災後」のつながりを意識してもらいたい教育観光にとっては、時間の経過をたどってもらえるという点において、有用といえるだろう。

3 提案

以上二点を踏まえ、我々は学生目線に立った教育旅行プランを作成した。以下の通りである。

1日目	12:00	内湾に移動、魚市場見学&昼食	公民・食育
	12:45	周辺探索[紫市場等]	
	13:40	大島に移動	
	14:45	鳴き砂体験	理科・地学
	18:00	階上にて民泊開始、夕食	防災
2日目	09:00	階上・岩井崎見学	
	09:45	気仙沼向洋高校旧校舎見学	防災
	11:00	津波体験館見学	防災
	12:00	折石見学	
	13:00	唐桑・カキ小屋で食事	食育
	14:00	一景島神社訪問	歴史・古典
	14:30	気仙沼高校訪問、交流	
	16:00	終了、帰路へ	

図1 我々が作成した教育観光プラン例

このプランの主な対象は高校生である。学校の授業、例えば古典や地学といった教科と関連させることによって、学生の関心を集めることをねらった。

内湾では、気仙沼の個性である海の幸を満喫できる。また、教育旅行のつかみとして、海の街だと視覚的に捉えられる魚市場は、絶好の場所だ。大島では、貴重な鳴き砂を体感してもらおう。

ここでのねらいは、震災後でも変わらない自然を意識してもらうことだ。また、気仙沼高校の自然科学部では、鳴き砂の研究を精力的に行っている。後述の気仙沼高校での交流でも、会話を大いに弾ませてくれることだろう。

2日目は、震災について注目している。まず階上の岩井崎・気仙沼向洋高校は、津波によって破壊された街や、大きく損壊した校舎を見る。前日に民泊で話された震災当時の様子も含め、学生に大きなインパクトを与えるだろう。



写真1 気仙沼向洋高校

唐桑半島に移ってからの津波体験館・折石は津波の大きさを伝える。特に折石は、18mの大理石の先端2mが100年前の津波で折れたという石であり、津波がいかに強大か分かる。

一景島神社は気仙沼に昔からある神社で、震災後の再建で昔の姿を取り戻した鳥居とかさ上げによる50cmの段差が一度に見られる場所だ。

最後に予定している気仙沼高校での交流は、今まで見てきたことを整理し、同年代の学生と交流することで、震災や自分の将来について意見を持ってもらい、かつ交流によって視野を広げてもらうことを目的としている。

前述のストーリー性についての工夫は、最初に内湾で「気仙沼はこういうところだ」と理解してもらう。翌日、震災と津波の被害・強大さを見た後、気仙沼高校で同世代の我々と意見を交換し合う運びとなっている。

地域密着性については、民泊という形で地域の人の話を聞いてもらうほか、一景島神社という穴場スポットを回ってもらうことにしている。

4 結論

今回研究して、気仙沼の教育観光には、現在のものに加え、学生がより「来たい」と思えるように、学生目線に立って企画することが必要と分かった。さらに、地域に密着した観光をすること・観光に物語性のエッセンスを加えることもまた大切であるといえる。

5 課題

今後の課題は3つある。

1つは、旅行の時間が足りないということだ。実際に観光プランの各地を回ってみて分かったのだが、今のプランだと一つあたりの時間が短く、せっかくの観光施設を十分に生かせなくなる。2泊3日にするなど、工夫が必要である。

2つめに、各施設のキャパシティに限界があるということがある。津波体験館は受け入れ可能なのが最大80人、それ故大規模な教育旅行に対応できないため、複数チームに分けるといったことを考えなければならない。

最後は、気仙沼の‘ひと’をよりアピールすることだ。機会があって福井で発表させていただいた際、気仙沼のよさを聞かれ、胸を張って答えたのが人情だった。その答えに、福井の人達は「気仙沼に行きたくなった」と言ってくれた。気仙沼の人達には、全国各地に誇れるあたたかさがある。この良さは全国の人々に共感してもらえる。気仙沼の‘ひと’を全国にアピールしていきたい。

6 参考文献

- ・宮城県教育旅行ガイドブック
<https://www.pref.miyagi.jp/kankou/kyoiku/html/index.html>
- ・Concierge, Akita
<https://www.con-akita.com/>
- ・観光庁 <http://www.mlit.go.jp/kankocho/>
- ・文部科学省・高等学校学習指導要領（文部省告示第58号 平成11年3月29日）
- ・気仙沼観光コンベンション協会の皆様